



「悟浄歎異」 1

一、はじめに「悟浄の「手記」を覗いてみる

前回の「悟浄出世」(以下「出世」)に続き、今回は一九三九年一月に脱稿された「悟浄歎異―沙門悟浄の手記―」を取り上げたい。

発表の順番はこの「悟浄歎異」(以下「歎異」)が先だが、内容は後に執筆された「悟浄出世」(以下「出世」)の続編のようになっており、三蔵法師の弟子となっている悟浄が、天竺への取経の旅路の中で、同行者の孫悟空、猪八戒、三蔵法師達の行動原理や生き方を学んでいくうちに「観察者」から「行動者」への転身を望むようになるという内的変化が語られる。

さて、従来この作品は、自由闊達な悟空と、慈愛と内なる強さを持つ三蔵法師という二人の「行動」の「天才」と、それに憧れる受動的な観察者の悟浄といった対比的構図で捉えられ、かつ悟浄の視点が作家中島敦の視点に重ねて読み取られてきた。

たとえば佐々木充は、行為者になれない悟浄が願望するものとして、「悟空の行為性と三蔵の超行為性」に着目する。そのうえで、悟浄の「資質」から「悟浄が最終的に求めるものは、悟空的行動を超越したところに在る三蔵法師的な内剛性である」とし、「外への行為者」である悟空から「内的な行為者」である三蔵に生き方の願望が移っていくことを指摘する^①。箕野聡子もまた悟空を「行動者」、三蔵を「行為」者と分け、やはり三蔵法師の「生き方」を目指している^②。別視点では、山下真史が当時の中島が抱えていた「自意識過剰の克服の可能性」を「歎異」創作に託したと読む^③。

このように、多くの「歎異」論は、何が語られているか、そのモチーフにどのような中島敦の真実が読み取れるかに主眼を置いてきた。しかし、それでは「歎異」の文体の独自性や、中島敦を知らずとも評価される作品の現代性を十分には説明できないのではないか。そこで今回は、モチーフの解釈や作家論的なつながりの解釈よりは、どの

ように記されており、何が読者に読みとられるかといった視点から、文体にアプローチしてみたい。

たとえば「わが西遊記」のテキスト（種本）は、堀誠の調査によれば、中島の蔵書に収められていた『続国民文庫』第十三巻の『絵本西遊記』に依拠することだ。⁴しかしその文体は三人称視点であり、語る対象とは距離を保った無名の語り手による「物語を語ること」を目的とした形式をとっている。これに対し、中島の「悟浄歎異―沙門悟浄の手記―」は、その副題が示す通り、一人称視点で語られる「手記」（個人的な記録）の形をとっている。悟浄というキャラクターの視点に絞り、主観的に対象を捉える文体を選択することで、対象の挙動がダイレクトに読者に伝わるだけでなく、悟浄の眼にはどのように映っているかという、偏向して歪な内的世界を覗き見させる効果がある。すなわち、「歎異」は「観察する悟浄の視点」を観察するという、語りの二重性を前提に楽しむ作品となっているのだ。たとえば作品冒頭で、悟空が八戒に変身の術を教えている場面があるが、悟浄は彼らの輪に入らずにその様子を観察する立場をとる。

「やつて見ろー」と悟空が言ふ。「竜になり度いと本當に思ふんだ。いいか。本當にだぜ。此の上無しの、突きつ

めた氣持で、さう思ふんだ。ほかの雜念はみんな棄ててだよ。いいか。本氣にだぜ。此の上なしの・とことんの・本氣にだぜ。」

「よしー」と八戒は眼を閉ぢ、印を結んだ。八戒の姿が消え、五尺ばかりの青大将が現れた。傍で見てゐた俺は思はず吹出して了つた。

感性重視で天才肌の悟空が問答無用で突きつける「本當に」「本氣で」といった純度の高い言葉は、八戒にとつては不可能性の高い命令、現代に言う「無理ゲー」にほかならない。この冒頭の関係性を「作品の見取図」と捉え、「悟空はまさに純粹行為者であり、八戒はそうなることを願望する者であり、悟浄は願望しつづいまだに思う者、歎異する者なのである」（佐々木充）と解釈することもできるが、まず読み手が受け取るのは、思索家の悟浄も「思はず吹出してしまふ直感的なユーモアだろう。傍らで観察する悟浄は、悟空と八戒のやり取りから、天才と一般人（妖怪）との次元の違いを察知する。しかしここでは悟空と八戒へ向けられた悟浄の親愛の情が優先されている。厳密に開いている両者の差を深刻なモチーフにはせず、あえて対話文で記すことで、面白い寓話のように仕上げているのである。ちなみに、内省的に生きてきた悟浄の眼には、悟空に限